こだま俳壇（９月通信句会）

友逝きて名残りの月の一人酒	角田英昭
母の手が鉛筆削る月夜かな	瀧澤正行
満月を背負いて帰る田舎道	白井保次郎
月を愛でいつか想いは無言館	松尾佐知子
人消えし廃墟の町の月明かり	中野みどり
終バスの月の鉄橋渡り消ゆ	田中一男
言訳の唇見つめ秋扇	友井眞言
旅心深まりゆくや秋白し	小室豊子
はらからの訃報飛び込む無月かな	三井光子
月の宴一升瓶に薄かな	柳瀬節子
アメンボウわがもの顔の秋の池	並木まり子
平平と子に任します墓掃除	高橋和江
青空に向日葵笑い子も笑う	常世田芳子
故郷や山深き道捨扇	木村武子
繰り返し開いては閉じ秋扇	島田多嘉子
月見草今宵も雨月闇深し	中村桂子
猛暑過ぎ座卓に座る秋扇	後藤貞夫
港行くあかいくつバス小望月	太田土男先生